

世界史

日程	大問	出題分野・テーマ	難易度
2月7日	I	古代から現代までの南アジア・イスラーム史	やや易
	II	中世・近世ヨーロッパ史	標準
	III	近・現代中国史（一部ソ連史を含む）	標準
2月8日	I	先史、古代オリエント・地中海世界の歴史	やや易
	II	清朝の歴史（明末を含む）	やや難
	III	第二次世界大戦期から戦後にかけての国際関係・国際機関	標準
2月9日	I	古代中国の文明、秦・漢の歴史	やや易
	II	アメリカ合衆国の歴史（建国から近年の政治動向まで）	標準
	III	アフリカ・ラテンアメリカ・東南アジアにおける植民地支配と独立	標準

＜出題傾向＞

いずれの日程も、15問ずつの大問3題構成で、小問数は計45問、全問マーク式の多肢選択問題で構成されている。各大問ではそれぞれテーマに沿ったリード文が提示され、その内容に関連する小問が設定されている。時代においては先史時代から近年の国際関係まで、地域においてはアフリカやラテンアメリカなど周辺地域と捉えられがちな国・地域までもが対象になっており、高等学校「世界史探究」の全学習範囲からまんべんなく出題されている。

出題形式は、リード文中の空所に当てはまる語句を選択する問題、下線部に関する適切な語句（もしくはその組合せ）を選択する問題、年代並べ替え問題、4択正誤問題、正誤組合せ問題が見られた。いずれの日程も、語句選択問題よりも正誤問題の出題数が多いが、正誤問題では各選択肢の記述の中に事実と異なる語句が含まれているものがほとんどで、誤りを見つけやすいつくりになっている。今年度は、グラフ・地図・表などの資料問題、また、共通テストで見られるような史料読み取り問題の出題はなかった。

各日程の傾向をそれぞれ分析すると、2月7日では問題IIの中世・近世ヨーロッパ史で正誤問題が多く出題されており、ほかの大問よりも正解を導くために判断しなければならない要素が多かったと言える。なお、年代並べ替え問題は、本日程のみ出題されなかった。2月8日はほかの日程よりも正誤問題の割合が多く（45問中28問）、年代並べ替え問題も3題出題されているため、3日程の中では難易度が最も高いと感じられたかもしれない。一方で、苦手とする受験生が多い現代史（第二次世界大戦後の歴史）からの出題は他日程と比べて少なかった（45問中5問のみ）。2月9日は年代並べ替え問題は1題のみの出題で、語句選択問題と正誤問題の出題数のバランスがよく、解きやすい問題が多く出題されたが、問題IIで2000年以降のアメリカの大統領選挙の結果が問われているほか、問題IIIではいわゆる「第三世界」の現代史について多く問われているため、現代史や周辺地域の歴史を苦手とする受験生は苦戦したかもしれない。

全体の難易度はいずれの日程も標準的で、教科書に記載のある内容の中でも基礎的なものが多

く扱われており、教科書本文に登場しない語句や細かい知識が問われることはない。

リード文はいずれも 1 ページ以内に収まる分量で、特に語句選択問題は時間をかけずに解答を導くことができる問題も少なくないが、半数強は 1 文ごとに誤りを見つける必要がある 4 択正誤もしくは正誤組合せ問題であることを考慮すると、時間配分にも気を配る必要があると言えるだろう。ただし、多くの受験生にとっては、時間内ですべての問題に解答することは十分可能である。

総合的に見ると、教科書の全範囲の基礎的な内容をしっかりと学習した受験生にとっては、解きやすい標準的な難易度の問題で構成されていると言える。

＜学習対策＞

〔周辺地域や近年の国際関係までおろそかにしないこと〕

すべて教科書に記載のある基本事項から出題されているが、出題の対象となるのは先史時代から近年の動向までの全時代で、周辺と捉えられがちな地域の現代史からも多く出題されている。通史学習を開始したばかりの時期は、1 つの単元を完璧にしようとしてしまう受験生が少なくないが、最初は完成度や細かい事項にとらわれず、「時代ごとの大きな枠をつくる」ようなイメージで、教科書の太字のキーワードを中心に、なるべく早く軸となる通史学習を完成させることをすすめる。

〔人物ごとに事績を整理し、他地域の歴史とつなげよう〕

正誤問題は、選択肢文の中にある人物と間違えやすい別の人物が含まれているなど、誤りのポイントを指摘しやすいつくりになっている。教科書の本文で言及されている人物については、その人物の事績を箇条書きにして整理しよう。地域や国ごとに主要人物についての「タテ」の整理をある程度進めたあとは、別の地域の同時代の人物とならべて関連づけることで「ヨコ」の整理をすると、多地域の事象を問う年代並べ替えや正誤問題への対応力を身につけることができる。

〔地図情報を「文字情報」に変換できるように〕

今年度は地図の出題はなかったものの、遺跡や都市、河川の位置を理解していないと解けない問題が出題された。このような問題に対応するには、教科書の地図を視覚的に理解する作業はもちろんのこと、それを「文字情報」に変換することができるように練習することが重要である。地図がそのまま出題されれば大体の位置を指摘できるものでも、「下流」「上流」「東岸」「西部」など、文字で表現されると正しいかどうか迷ってしまうことが多い。主要な都市や河川、遺跡や建造物などについては用語集の項目に必ず位置情報（「〇〇の東部に位置する」など）が掲載されているので、こうした情報を頭の中で地図に置き換えることを意識しながら練習する習慣をつけよう。

〔文化史は「通史の中に位置づける」ことで定着させよう〕

各日程で、文化史に関する知識を問う選択肢や語句選択問題が見られる。文化史は、教科書では表形式でまとめられていることも多く、通史から独立した分野として扱われる印象を受けるが、各国史の中に位置づけると理解が深まりやすく、記憶にも定着しやすい。ある芸術や文学作品の名前と作者を結びつけることは基本であるが、それがどこの地域のどの時代のものなのかということや、当時の統治者の名前、同時代の象徴的な出来事などもセットで整理するとよい。ある時

代を象徴する様式や潮流については、どのような社会的背景に影響を受けてそれが生まれたのかという視点で整理すると、文化史の中にも通史のような流れを見出すことができ、知識の定着につながる。

世界史の学習は覚えなければならない情報が多く、細かい事項にとらわれてなかなか通史学習が進められない人もいるだろう。俯瞰的に「枠組みをつくる」ようなイメージでまずはテンポよく進め、あとから中身を充実させて立てていくような意識で学習に取り組んでいこう。

以上